

我慢できなくなった信吾は、花火に見入っている少女に気づかれないようにジリジリと後ろにまわりこんだ。そして、「コトナさん！」と背後から抱きしめる。

「えっ？ し、信吾さん？」

コトナが、驚きと戸惑いの入り交じった声をあげた。

信吾はかまわず、浴衣^{ゆかた}越しにバストを揉みだき、同時にうなじに舌を這わせる。

「あつ、ちよっ……んんっ、そんな……ああ、信吾さん、ダメ……んくうっ、こんなところで……」

少女が身悶えして、愛撫から逃れようとした。しかし、少年の手のひらにはバストの頂点にある突起の変化が、はつきりと感じられる。

「コトナさん、乳首が硬くなつてきているよ」

「ああっ、そんなこと……だって、はうんっ……し、信吾さんが、あはあん、オッパイを揉むからあ……」

信吾は浴衣の衿から手を滑りこませて、ささやかなふくらみにじかに触れた。

「ああんっ。こんなのって……あの、するなら家に帰ってからに……」

「ダメだよ。俺は、今ここをしたいの。今のコトナさん、すごく魅力的で我慢できなくなっちゃったんだ」



と言いながら、少し力を入れて乳房を揉む。さらに、白いうなじにもあらためて舌を這わせる。

「んくうつ……そんつ……ああつ、信吾さんの意地悪う……あふううう……」

そう言いつつも、コトナの抵抗が弱まる。元来の性格か、バストへのコンプレックスのせいか、彼女は「魅力的」とか「綺麗」といった褒め言葉に弱い。

「あつ、んんつ……はあああ……ううううん……それ、あああんつ、首も感じ……くはああああん」

バストとうなじを刺激しつづけているうちに、少女の口から次第に熱い喘ぎ声がこぼれはじめた。

（オッパイが汗ばんできた。それに、コトナさんの匂いが少し強くなったかな？）

そんな微妙な変化も、少年の興奮をいちだんと高める。

帯をほどいて浴衣ゆかたの前をはだけると、白い肌襦袢はだじゆばんがあらわになった。

つづいて襦袢の紐をほどくと、布地に負けないくらい白い肌が現われた。意外なことに、彼女はブラジャーだけでなく、恥部を包んでいるはずの下着を身につけていなかった。そのため、淡い恥毛に覆われた秘裂も一気に露出する。

「コトナさん、パンティー穿いてなかったの？」

「え、ええ……麻里さんに言われたんですけど、浴衣で普通のショーツを穿くと、ラインが浮きでてあまり見た目がよくないって……浴衣用の下着もあるらしいんですけど、用意していなかったから……」

と、なんとも恥ずかしそうに告白するコトナ。浴衣や襦袢はともかく、さすがに下着まで少年の母のものを借りる気にはならなかったようだ。

花火の色に染まる少女のスレンダーな肉体、そして羞恥に染まった顔が、いつになく艶やかに見える。

我慢できなくなった信吾は、浴衣を羽織ったままのコトナの身体を正面からギュッと抱きしめた。

「あつ、信吾さん……」

コトナも、すぐに少年の背中へと手をまわしてくる。

それから二人は見つめ合い、どちらからともなく唇を重ねた。

「んっ、んっ……んちゅ、んちゅ……」

信吾とコトナは、声をもらしながらネットリと舌を絡ませ合った。そうしているだけで、舌からなんとも言えない心地よさがひろがり、幸せな気分になれる。

同時に、少年のなかで興奮がさらに高まる。

ひとしきり舌を絡ませてから、信吾は名残惜しさをこらえながら唇を離した。すると、二人の間に唾液の糸が伸びて、ゆっくりと垂れていく。

「はあ、はあ……信吾さあん」

と、少年を見つめるコトナ。すでに彼女のなかでも官能の火がついたのか、酔っぱらったように頬が紅潮し、瞳も潤んでいる。

信吾は、少女を近くの木に寄りかからせた。そしてしゃがみこむと、うつすらとした茂みに覆われた女性の中心を見つめた。だが、月明かりと花火に照らされたそこは、まだほとんど濡れていない。

「コトナさん、舐めるよ」

そう言うなり、少年は秘裂に舌を這わせた。

「ひゃううつ！ 舌が……ああつ、いいですう！」

もはや抵抗を示すこともなく、コトナは歓喜の声をあげる。

信吾は、少女の片足を持ちあげて貝の口を割りひろげ、あらわになったシエルピンの肉襞に舌を這わせた。

「ああんつ、それえ！ ふううんつ、感じ……ひゃあんつ、立っていられません！」

信吾の頭を押さえつけるようにして、コトナが甲高い喘ぎ声をもらす。実際、少女

の足はガクガクと震えていた。木に寄りかかっていたいなかったら、本当に倒れていたかもしれない。

「あつ、ひいっ！ ああんっ！ ふうう……あんっ、ああっ！」

甘い声で喘ぎつづけるコトナ。間もなく、源泉から透明な蜜がトロトロと溢れでてきた。一部は少女の太腿に透明な筋を作り、一部が地面にポタポタと流れ落ちる。

少年はいったん口を離すと、コトナの顔をあらためて見つめた。

浴衣の前をはだけ、股間から淫液を垂らす少女。その姿が色とりどりの光に浮かびあがるさまは、とてつもなく淫靡いんぴに見える。

「ああ……信吾さあん、欲しいいい……」

そうつぶやいたコトナの目尻はトロンと垂れさがり、どこかうつろに見える。

信吾がズボンとパンツをいそいそと脱ぐと、メガネの少女がすぐ足もとにひざまずいた。

「はああ……信吾さんの、とっても苦しそうですね？ 今、楽にしてさしあげます」
コトナは、ためらう素振りもなく勃起した一物に触れた。

「これ、いつ見てもおっきいです……でも、大好き。だって、信吾さんのだから……あむ……」